

# 幼児が他児に興味を持つ過程における大人の存在の意義に関する一考察 — 子育て支援広場における A 児の 1 年間の保育記録にもとづく検討 —

奥 田 美由紀

## A Study on the Meaning of Adult Involvement in the Process of Young Children's Interest in Other Children — A case study based on one-year care of a child in an open space for local parents and children —

Miyuki Okuda

### Abstract

An analysis focused on how preschool children engage and become involved with people at a childcare open space (support plaza). The researcher found out that there is a big meaning in the presence of adults in the process by which an infant has an interest in another child. From the point of view of adult involvement, child rearing support squares where adults (parents, childcare workers and students, etc.) outnumber the amount of children can shift smoothly to group childcare, and it can be said that it is important for a child's developmental security.

**Key words** : relationships, human relations, childcare support plaza

### 1. 問題と目的

筆者は、幼稚園教諭として子どもと生活していた頃、3歳児は入園当初は泣きながら親から離れて登園し、保育者を抱りどころとしながら次第に子ども同士の関係を広げていく子どもの姿を見てきた。保育園に通う3歳未満児であれば尚更のことだろう<sup>1)</sup>。親から離れた子ども集団における他児や保育者とのかかわりの中で子どもの育ちを捉えてきた筆者は、子育て支援広場での保育に携わるようになり、たくさんの大人の中で子どもが求めたとき常に誰かに受け止めてもらえる無理のない子どもの姿を知った。子育て支援広場において、大人が子どもの欲求や意思を大切にしていると、子どもは人とのかかわりを求め、かかわりを受け、その関係性は広がっていった。子どもが親を抱りどころとしながら次第に親以外の人とのかかわりへと広がりを見せる姿は、愛着理論の中でも繰り返し言われていることである。

金田(2004)は、母子関係研究の側から集団保育(デイケア)研究に求められていることとして、「デイケアの子どもへの影響のメカニズムを明らかにすること、さらには、子どもの発達を保障するケアの質・内容・条件を明らかにすること」を挙げている<sup>2)</sup>。日本における集団保育研究は、1950年代の後半から積極的に行われてきている。金田は、「乳児を研究する際には、乳幼児のおかれている生活基盤をとらえると同時に、育てる側の保育の質・内容・条

件とをかかわらせて、その発達をみていかねばならない」とし、発達を保障する視点の重要性を強調している<sup>3)</sup>。

かつて人々は、群れて子どもを育ててきた。親戚や近隣の集まりの中で、たくさんの目と手と心を掛けながら子どもを育ててきた歴史がある。それは、先人の子育ての知恵の伝承の場でもあり、様々な世代間での交流が互いにとって必要だった。しかし、核家族化が進み、子育てが孤立化し、限られた空間で子育ての負担が親だけに集中するようになり、様々な問題が表出してきた。このような状況の中で、地域の子育て支援広場は、親同士の交流や相談、そして子どもにとって望ましい体験や学びの場を提供することを目的として活用されている。

一方、現在日本において最大の問題になっている少子高齢化により、働き手が減少し、さらに加速すると予想されている中で、女性の更なる社会進出が期待され、同時に待機児童の解消が政策的に進められている。2015年以降、保育所の他、特定地域型保育事業や幼稚園型認定こども園、幼保連携型認定こども園などの数が増え始め、2014年までは24,000か所程度だったものが、2015年は28,783か所、2016年は30,859か所、2017年は32,793か所と増加の一途を辿っている<sup>4)</sup>。

このように、家庭での子育ては孤立化する現状と共に、女性の社会進出に伴い早くから保育所に子どもを預けることを推し進める社会の動きの中で、子どもの発達保障は最優先課題として考えられているのだろうか。

かつては、地域における子ども集団での遊びが日常的に行われ、年上の子どもが年下の子どもの面倒をみたり、年下の子どもは年上の子どもの遊びや姿を見て模倣しながら様々なことを学んできた<sup>5)</sup>。その文化が消えつつある時代になった今日、子どもは家庭における親子関係から就園によって大人数の子ども集団に生活が一転する時期がある。この時期の急な変化は、子どもにとって大きな負担となっているのではないだろうか。かつて地域の子ども集団が担ってきた群れのリーダー的役割を、現在は子育て支援広場の保育者が担いつつある。そこで、子どもは親との関係を軸としながら、どのように他児との関係を作り、子ども集団へと移行しているのだろうか。人間関係という視点から捉えると、幼稚園や保育所とは違った役割が子育て支援広場にはあると考える。

幼稚園や保育所等の集団保育の場における人とのかかわりの発達に関する研究<sup>6) 7)</sup>は、積み上げられているものの、親との愛着関係から集団保育へ移行する時期の子どもを対象とした研究は多くはない。

本研究では、子育て支援広場における日常的な保育記録を分析、検討することで、子どもが他児に興味を持つ過程における親や保育者などの役割や共に過ごすことの意味について考察する。

## 2. 研究方法

### (1) フィールドおよび対象

#### ① 「親と子の広場」について

「親と子の広場」（以降「広場」と表記する）は、地域の子育て支援広場として短大に開設後12年となる<sup>8) 9)</sup>。2018年度は週2回、火・金曜日の10時から11時30分まで開かれている。各回親子は申し込み不要で自由に参加でき、保育者は2～3名で対応しており筆者もその一人である。過去4年間の開催日数と参加者延べ人数、内訳の推移は、表1

表1 4年間の広場の開催日数と参加者延べ人数

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	
開催日数	30日間	52日間	51日間	42日間	
参加者	0歳児	42	78	126	101
	1歳児	7	191	99	116
	2歳児	43	110	129	100
	3歳児以上	0	52	12	6
	保護者	76	396	279	300
	短大1年生	80	53	158	67
	短大2年生	27	74	125	77

に示す。保育者を養成するコースのため、学生も自主的に参加している。過去4年間の参加者延べ人数と1日あたりの平均参加者数は、表2に示すとおり、子ども7名、大人12名（親6名、学生4名、保育者2名）である。

表2 1日あたりの平均参加者数（小数点以下、四捨五入）

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	合計	一日あたりの平均参加者数
開催日数	30	52	51	42	175	1
子ども	98	431	366	323	1,218	7
親	82	396	279	300	1,057	6
学生	180	127	283	144	734	4
保育者	60	104	102	126	392	2
大人合計	322	627	664	570	2,183	12

② 対象児について

幼稚園就園を仮定し、集団保育に移行する前の年齢である2～3歳を対象とした。2年間の経過を見るため、継続して参加しており、参加日数が82日中56日間参加しているA児に焦点を当てた。A児は、父親と参加することが多く、両親揃って参加することもあった。

就園前の年齢に焦点を当てることで、親との関係から子ども同士の関係へと移行する「人とのかわり」が明らかになるのではないかと考えたためである。また、表3に示したように参加回数が多いことで、個人記録も多いことが、対象児を決めた理由である。

表3 児の年齢と参加日数

	2014年度 開催日数：30日		2015年度 開催日数：52日		2年間合計 開催日数：82日
	年齢	参加日数	年齢	参加日数	合計参加日数
A児	2歳	11	3歳	45	56
B児	2歳	19	3歳	1	20
C児			3歳	3	3
D児	2歳	4			4
E児	2歳	10			10
F児	2歳	1			1
G児			2歳	19	19
H児			2歳	1	1
I児			2歳	5	5
J児	1歳	8	2歳	29	29
K児			2歳	1	1
L児			2歳	10	10
M児			2歳	1	1
N児			2歳	3	3
O児			2歳	17	17
P児			2歳	22	22
Q児			2歳	2	2
R児	1歳	1			1

(2) 時 期

A児が広場に初めて参加した2014年11月から、幼稚園入園（2年保育）直前の2016年2月までの1年4か月間記録した。この間の広場の開催日数は、82日間であり、A児が参加した日数は、56日間である。A児の年齢は、2歳8か月から3歳10か月までの時期である。

(3) 事例の分析

① かかわりの対象の変化（分析1）

かかわりの対象は、①一人遊び、②親、③保育者または学生、④他児と大きく分類した。しかし、かかわりの対象は常に変化するため、一人で遊んでいる最中に親にかかわりを求めた事例の場合は、①一人遊びと②親の両方でカウントすることとした。その結果、かかわりの対象は表4の通りa～mの13パターンとなった。また、年齢を〈1期〉（2歳8か月～2歳11か月）、〈2期〉（3歳～3歳4か月）、〈3期〉（3歳7か月～3歳10か月）と4か月毎に区切り、時期ごとの傾向をみる。

表4 かかわりの対象別13パターン

パターン	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
一人遊び	●	●	●	●	●	●							
親		●	●				●	●		●	●		
保育者・学生	●		●	●				●	●		●	●	
他児				●	●					●	●	●	●

② 他児とのかかわりの内容（分析2）

他児とかかわりのあった事例を抽出し、そのかかわりは、A児の能動的なかかわりだったのか、他児から求められた受動的なものだったのか、さらに、その結果、拒否したのか受け入れたのか、また、直接的なかかわりは見られなくても、他児を意識していると捉えられる姿も含め、その傾向をみるため、①意識しているが直接かかわりはない（傍観・模倣・平行等）、②他児からかかわりを求められるが拒否する、③他児からかかわりを求められ受け入れる、④能動的にかかわりを求めるが拒否される、⑤能動的にかかわりを求め受け入れられる、という5つのカテゴリーに分類し、時期ごとの回数をみる。

③ 大人とのかかわり方と内容（分析3）

金田（2004）は、「乳幼児から捉えた大人との関係の質」として、大人のかかわり方を5つのパターンに分け、子どもの育ちにとって大人がどういう存在としてそこに居たかという内容との結合が重要であると述べている。子どもの内面に働き掛けるには、外からの働きかけが必要であり、「最近接領域にある知的な刺激を発問として呼びかける」ことであると説明している<sup>10)</sup>。

<大人のかかわり方>

I 安全基地として依拠できる存在 I' 内接：(I)に依拠しながら徐々に外に向かって動き始める II 接在：互いにかかわりあって成立させる相互関係の存在 II' 外接：(II)から徐々に内へ向かって動き始め外側に接する III 模倣のモデルになる対象としての存在
---

<大人のかかわりの内容>

ア. 子どもに課題を投げかける人 イ. 子どもの安全基地になったり自我を補助したりする人 ウ. 子どもと全く対等な仲間としてかかわる人
---

大人のかかわりのあった事例をあげ、この「大人のかかわり方と内容」を手がかりに、大人（親、保育者、学生）について分析する。

### 3. 結果と考察

#### (1) かかわりの対象の変化

すべての個人記録からA児の個人記録を抽出し、一つの遊びを1つの事例とすると、107事例あった。この107の事例を「かかわりの対象別13パターン（表4）」と時期で分類すると、図1のようになった。

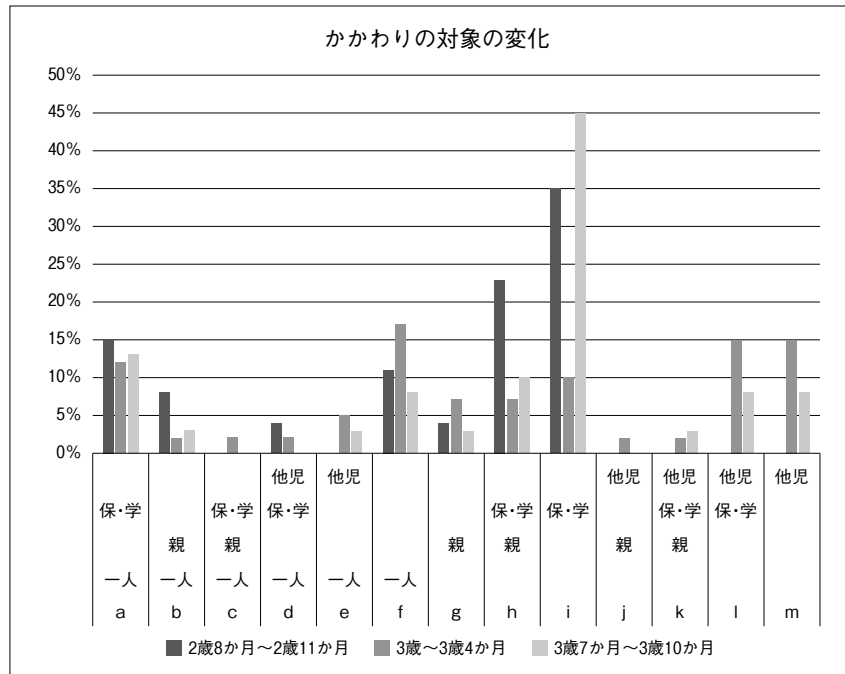


図1 かかわりの対象の変化

〈1期〉では、他児とのかかわりは1事例のみだった【事例25】。また、保育者や学生とかかわるパターン a、h、i の割合が高い傾向が見られた。そして、〈1期〉にはほとんどなかった他児とのかかわりが、〈2期〉〈3期〉に増えた。また、時期にかかわらず、パターン a（保育者や学生とかかわりながら一人で遊ぶ）、パターン f（一人遊び）、パターン i（保育者や学生とかかわる）は割合が高い。また、パターン g（親とのかかわり）も、安定した割合で推移している。この結果から、〈1期〉～〈3期〉通して、安心してじっくり遊びこむ時間はどの時期でも大切であること、さらに大人とのかかわりは常に多いことが分かる。

#### (2) 他児とのかかわりの内容

A児が他児とかかわりを持った事例は、107事例中25事例あり、他児とのかかわりの内容の数は、表5の通りであった。

表5 他児とのかかわりの内容の数

	〈1期〉	〈2期〉	〈3期〉
① 意識しているが直接かかわりはない	0	8	2
かかわりを求められる	② 拒否する	1	5
	③ 受け入れる	0	0
かかわりを求める	④ 拒否される	0	2
	⑤ 受け入れられる	0	2

他児とのかかわりは2歳10か月から見られた【事例25】。【事例25】では、6か月の男児に対して手を振り「来ないで」という意思表示をしている。そして、2歳10か月のA児は、自分に近づいてきた他児を拒否している【事例30】。また、

同じ遊びをしているが子ども同士のかかわりは見られず、平行遊びだった【事例27】。このように、〈2期〉から他児を意識することが増え始めるが、拒否することも多い。3歳2か月から能動的にかかわりを求める姿【事例37】【事例39】【事例46】【事例49】、他の子どもがしていることを模倣して自分の遊びを展開する姿【事例42】、他の子どもがかかわってきたときには、泣いて嫌がる姿も見られた【事例47】【事例48】【事例56】。しかし、他の子どもがいるところに玩具を取りに行けない時には、親と一緒にいくことはできた【事例53】。このように、受け入れてもらえたり、拒否されたりする経験を積んでいった。親や保育者を含む複数名の子どもが同じ空間で遊ぶことがほとんどだったが、大人と複数の子どもが一緒にいる場面では、大人と子どもはまだ1対1のやりとりのみで、A児は他児とのかかわりよりも大人とのかかわりを好んでいた【事例55】【事例57】。しかし、次第に他児の動きを目で追ったり、言動に対して微笑んだりするようになった【事例64】。直接かかわりはなくとも他児の存在を意識しており、同じ空間で過ごすことが人とかかわりが生まれるためには大切な要素であることが分かる。

3歳7か月を過ぎると、A児は他の子どもがしていることを模倣して自分の遊びを展開したり【事例69】、他児がA児のしていること模倣して一緒にやりたがったりした【事例75】【事例85】。そして、物のやりとり【事例97】【事例107】や、共通のイメージの世界で遊ぶ姿も見られるようになった【事例102】。これらは、就園後に子どもが他児との関係を広げていく姿と同様である。

表6 他児とのかかわりがみられた主な事例

NO	時期	年齢	事	例
25	1期	2歳 10か月	キーボードのボタンを押して、リズムや音色が変わることを試している。そこへ、B児（6か月）を抱いた学生が横に座り、B児にもキーボードに触らせようとする、A児はB児に「ばいばい」と言って手を振る。	
27	2期	3歳 1か月	手押し車を気に入り押して歩いている。C児（1歳3か月）はもう1台を押し、お互いスピードを出している。時々二人でぶつかるが、大きなトラブルにはならなかった。	
30		3歳 1か月	様々な場面で他児が近寄っていくと、大事なものを取られるかもしれない、邪魔されるかもしれない、という思いなのか、悲しそうな顔で「パタピオ」といって拒否する。	
37		3歳 2か月	D児（2歳10か月）に近寄っていく。D児は、A児が自分に向かってくると、血相を変えてその場を去り、大声を上げて泣く。	
39		3歳 2か月	C児（1歳4か月）の動きをチラチラと確認しながらレゴブロックの動物を「はい」と渡してあげた。C児は黙っているが手を出して受け取った。母親が「どうもありがとう」などと代弁してくれている。A児は渡したことで満足している。	
42		3歳 2か月	あずきと大豆をC児がばら撒いていると、A児もすべての入れ物の豆をひっくり返し始めた。この転がってきた豆もクーゲルバーンに入れてみた。面白い転がり方をするので大喜び。また、玉が穴から外れて床を転がるのを慌てて追いかける保育者が面白いらしく、故意に玉を転がし始めた。	
46		3歳 3か月	E児（2歳6か月）が「ひつつきむし」をカップに隠して遊んでいたところにA児が座った。E児はA児に「いいよ」といってカップを1つ渡した。あとは自分に確保し、虫も1匹以外は全部自分のカップに入れて確保していた。A児は、虫を1匹だけもらったが、何も言わなかった。	
47		3歳 3か月	ショベルカーに乗っていたが、F児（2歳11か月）に取られて大泣きした。しかし、父親が他の汽車の乗り物を出すと、切り替える。汽車の乗り物を押していたので「乗せてくださいー」とパンダのぬいぐるみの片手を挙げて声を掛けると「だめ」と言われた。	
48		3歳 3か月	G児（2歳1か月）と扉のところで正面衝突した。お互い走っていた。A児のみ泣いた。痛みよりも驚きや怒りのようだ。G児は何も感じてないように気持ちはそれていた。	
49	3歳 3か月	「Dくん、いないね～」「わからないね～」など言葉が出てきた。今日はショベルカーの椅子の下に、カムカムバーを入れていたが、ちょっと離れた隙にG児がショベルカーに乗って行ってしまった。それに気づき、訴えに行ったが、G児はショベルカーを取られると思ってA児の頭を叩いた。訳を話して立ってもらい（というより母親が立たせ）カムカムバーを取り出せた。A児はそれで納得。叩かれたことよりも大事な自分のものが自分に戻ってきたことで落ち着いたようだ。G児は何も気にせず違う方へ走って行ってしまった。		

保育・食育プロジェクトの展開

NO	時期	年齢	事 例
53	2期	3歳 4か月	紙テープをはさみで切って、カップに入れた。「スプーンが無いと食べられない」と言うと、ままごとコーナーを見たが暗い表情。「みんながいて行けないね」とA児の不安と思われる気持ちを代弁すると、父親が「じゃあ、一緒に行こう」と手をつないで行った。帰りはスプーンを片手に笑顔で走ってきた。次に父親が犬を連れてきて「食べたいな」と声を掛けると、A児がスプーンで食べさせた。父親が上手に犬の口を動かし、おいしそうに食べる真似をするので、A児は声をあげて喜んでた。
55		3歳 4か月	ポットに果物やパンを入れてジュースを作りコップに注いでみんなにご馳走した。A児は、流し台の水をコップに入れて、そこいら中に撒くまねをしていた。F児が「貸ーして」と言いながら、A児の手からポットを取っていった。A児は、泣いた。保育者はA児と一緒に返してもらいにいった。しばらく追いかけた後、F児はポットを投げて、別の遊びに行った。
56		3歳 4か月	ショベルカーに乗っていると、F児（3歳）が大きな声で「貸ーして」ときた。A児はとっさにショベルカーを降りた。すかさずF児が乗って行ってしまった。A児は泣いた。貸したくなかったが、降りてしまったのだ。保育者とA児と一緒にF児を追いかけて「貸して」と言い続けた。するとF児は、ショベルカーを投げ出して、他の遊びを始めた。
57		3歳 4か月	ついたてで囲いを作ると、家に見立てている。入ったり出たりして遊ぶ。
64		3歳 4か月	A児が長細い缶にたくさんのペンを詰めたものをF児がさっと取った。A児は「だめー！」と言って表情を崩して激しく泣いた。保育者が「Aくんが詰めたペンだよ。取られたら嫌だよ。拾ってあげるね」と言って拾い始めると、周りに居た子どもも学生もみんなが拾い始めた。すると、それを見ていたF児も、「うんうん」と頷きながら一緒に拾い始めた。A児はすぐに泣き止んだ。
69	3期	3歳 7か月	キーボードの前にH児（2歳1か月）とG児（2歳5か月）が座って鍵盤を弾き始めた。するとA児も近くへ行き、人差し指を鍵盤に遠慮深げに近づけた。それで何事も起きなかつたので安心したのか、いつものように自由に弾き始めた。H児の母親が、子ども達が知っている様々な曲を設定してくれるので、その度に子ども達の表情もぱっと明るくなった。しばらくして、みんながその場を去り、A児が一人で弾き始めた。そこへ他の子がきたら、ワッと泣いた。人が来て自分の思うようにならないと「いや」とはっきり意思表示をする。
75		3歳 7か月	A児がアイロンビーズをばら撒いて遊んでいた。保育者が頭の前で振り掛けるとそれを真似して父親の頭にも掛けて遊びだした。ケタケタと笑っていると、G児と一緒に混ざってきた。A児を意識して、A児が持っているケースにビーズを入れたりしている。邪魔するというより、一緒に遊びたい様子。しかし、A児は、迷惑そうな顔をしている。
85		3歳 8か月	I児（3歳4か月）が、A児の後を追いかけてくると、A児は嫌がった。
97		3歳 9か月	父親のひざの上に座り、E児（3歳）にチョコレートもらった。
102		3歳 10か月	A児と、汽車と自転車にそれぞれ乗って「待ってー」「いいよー」と一緒に走った。「どこへ行く?」「お散歩」のやり取りが続いたので、行き先を色々といってみた。「海に行く?山に行く?」と聞くと「海」と言った。ソファの後ろを駐車場に見立て車を停めて海に入った。大きな紙を裂いて海を作り、水をかけて遊んだ。それからお弁当を作っかばんに入れて出かけ、海で食べた。F児（3歳）とJ児（2歳）も途中から入ってきた。お弁当を作ったり、食べたり、A児が使っていた食べ物を使いたがったので、それぞれが自分のお弁当箱とかばんをもてるようにした。そこで、お弁当の中身の取り替えっこを提案してみた。保育者が「たまごと何かを交換して?」というA児は黙ってピーマンをくれた。F児に「おいそう!」というA児は、スプーンに載せたいちごをくれた。J児は、おなべに材料を入れて、料理して、みんなに分けてくれた。
107	3歳 11か月	主にA児親子とお雛様を飾った。最後に雛あられをお供えして、広場の参加者のみんなにも分けてくれた。スプーンですくうのは難しいようだった。最後は、自分のお皿にピンを逆さまにして全部あげた。	

(3) 大人とのかかわり方と内容

大人とかがわりがみられた事例は、107事例中14事例だった。この14事例を「大人のかかわり方」でみると表7の通りであり、「大人のかかわりの内容」でみると表8の通りであった。

表7 分類1：大人のかかわり方

分類1	I	I'	II	II'	III
保育者	1期	1			
	2期		5	2	2
	3期		3	3	3
	合計		8	5	3
学生	1期	1	1	1	
	2期		1		
	3期				1
	合計	1	2	1	1
親	1期	2			
	2期		2		2
	3期	2	1		
	合計	4	3		

表8 分類2：大人のかかわりの内容

分類2	ア	イ	ウ
保育者	1期		1
	2期	2	2
	3期	8	3
	合計	10	6
学生	1期		1
	2期		1
	3期		1
	合計		1
親	1期		2
	2期	1	2
	3期		2
	合計	1	6

保育者は、A児に対して〈1期〉では「I. 安全基地として依拠できる存在」として「イ. 子どもの安全基地になったり自我を補助したりする人」としてかかわりをもっているが、〈2期〉以降は「I'. 内接:(I) に依拠しながら徐々に外に向かって動き始める」かかわりが5事例、〈3期〉には「III. 模倣のモデルになる対象としての存在」としてのかかわりが6事例と多くなっていく。かかわりの内容は、「イ. 子どもの安全基地になったり自我を補助したりする人」としてかかわりは少なく、これは、親も同じ空間で過ごしている子育て支援広場という特性により、この役割は親に任せる気持ちが強いことが伺える。しかし、「大人のかかわり方」と「大人のかかわりの内容」を結合してその傾向を見ると、全体的に偏りはあまりなく、保育者は5パターンのかかわり方と3つの内容を場に応じて組み合わせて行っていることが分かった(表9)。

表9 保育者のかかわり方と内容

分類1	I			I'			II			II'			III		
分類2	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ
保育者	1期		1												
	2期				1	2	2	1		1					2
	3期				1	2				3	2		1	5	1
	合計		1		2	4	2	1		4	2		1	5	1

一方学生は、「ウ. 子どもと全く対等な仲間としてかかわる人」としてかかわることがほとんどだった。状況に応じてかかわり方や内容を変えていくことはまだ無かった。

A児は2歳8か月の時、父親と手をつなぎ初めて広場に参加したが、すぐに遊具に近づき遊び始めた。父親はA児の気持ちを代弁したり、周囲の状況をA児に言葉で説明したり、常に言葉をかけながらA児に寄り添っていた。保育者や学生も、A児の遊びに沿うように声を掛け、徐々に距離を近づけていった【事例14】【事例22】。

A児は、父親と参加することが多かったが、父親は常にA児の後ろについて歩き、言葉で代弁したり、玩具を使って働き掛けたり、積極的にかかわりを持っていた。3歳を過ぎた頃から、他の子どもからの働き掛けに戸惑い、泣いて親の腕の中に帰ったり、親と一緒に他児が使っているところに玩具を取りにいったりした【事例53】。拠り所となる親の存在は、子どもが人とのかかわりの世界を広げていく過程において、子どもを支えている存在であることが分かる。このように保護者は保育者と同様に、〈1期〉では「I. 安全基地として依拠できる存在」として「ア. 子どもの安全基地になったり自我を補助したりする人」としてかかわりをもっているが、〈2期〉以降は「I'. 内接:(I) に依拠しながら徐々に外に向かって動き始める」かかわりが見られてきた。かかわりの内容は「イ. 子どもの安全基



地になったり自我を補助したりする人」6事例ともっとも多く、親がいる場面では、親がこの役割を担うことが多いことが分かる。

大人がA児の発達に応じてそれぞれの役割を持った存在とかかわりをしている【事例18】では、保育者は、「Ⅰ. 安全基地として依拠できる存在」として、「Ⅱ. 子どもの安全基地になったり自我を補助したり」し、学生は、「Ⅱ. 互いにかかわりあって成立させる相互関係的存在」として、「Ⅲ. 子どもと全く対等な仲間としてかかわり」、父親は「Ⅰ. 安全基地として依拠できる存在」として、遠くから見守っている。

表10 大人のかかわりの事例（下線部分が大人のかかわり）

NO	年齢	事	例
14	2歳 9か月	A児は、いつも始めにこの「からころツリー」に駆け寄る。何度も遊んでいる「からころツリー」だが、何に魅力を感じているのだろうか。木の板をビー玉が転がる「音」、ビー玉が上から下へ転がっていく「動き」、その「仕組み」だろうか。学生はそれを大事にしようと、時には声掛けはせず、時には働き掛けはせず、見守る。そして、「共感」する役目に徹している。	
18	2歳 10か月	A児は、常にお金をたくさん入れたバッグを持って遊んでいた。お気に入りのものは、誰にも貸したくなく、ずっと持っていたい時期なのかもしれない。お金を使いたい友達が近くに寄ってくると、体をすくめて全身で拒否していた。自己主張していた。「大切だから貸したくないよね」「嫌だよね」「使っていていいんだよ」と、その気持ちを言葉で受け止めてあげた。「自分の気持ちを出していいんだ」と感じて欲しいと思った。	学生は、テーブルにレジを用意しお店屋さんになって品物を渡し、A児からお金を受け取る役目になり、やりとりをした。父親は、少し離れた場所でその様子を見ていた。
22	2歳 10か月	ダンボールのトンネルの向こうで、「いないいないばあ」と遊んでいたら、トンネルがペッチャンコにつぶれてA児と学生は大笑いした。大風もパワーッと来た。この偶然が楽しくて、何度も何度も「ペッチャンコ」して遊んでいた。父親も遠くからやさしく見守ってくれていた。	
53	3歳 4か月	表6に記載	

#### 4. 総合考察

##### (1) 人とかかわりの広がり

家庭で育った子どもが初めて子育て支援広場を訪れた時、親の腕の中からじっと周囲を見ている子どもが多い。少し時間が経つと親が同じ空間にいることを支えとして、興味のある遊具へ手を伸ばすようになる。このことは、遊んでいる途中親の姿が見えなくなると、泣いて不安がり、親の姿を探すことから分かる。親は、少しの時間でもその場を離れるときには子どもに声を掛けてから離れるようにし、保育者が一緒にいることも伝えると、短い時間であれば、遊びながら待っていることができるようになる。また、安心感を得たいときや嫌な気持ちを表現したいときなどには親を求めた。子どもは発達に伴って、親が傍にいらなくても「心の基地<sup>11)</sup>」は自分の中に感じるができるが、この年齢の子どもにとって、見える場所に親（心の基地）を感じながら、親以外の人（保育者や学生）からのかかわりに応じることはごく自然であり、そのやりとりを経験しながら次の世界に目を向けていくことが分かる。家庭保育から集団保育へ移行する時期、集団の中に心の基地となる大人の存在があり、いつでも自分だけを最優先に受けとめてもらえることは、とても重要であることが分かる。子どもの数よりも多く大人がいることで大人にもゆとりが生まれ、子どもはその大人たちから見守られている安心感と多くのかかわりを受け、多様なモデルを見て、子どもは経験を重ね、次第に同年代の他児へと意識が向いていくことが分かった。

家庭での親子のかかわりから同年代の子どもとかかわりを急に促すのではなく、この広場のような場で、親とかかわりを基盤に少しずつ他の世代とかかわりが生まれてくる時期を過ごすことが大切であると考えられる。そして、それが就園を迎えた後の子ども集団への移行を力強いものとするだろう。

一方、一人で何かに熱中して遊ぶ姿は、時期にかかわらずよく見られた。しかし、その内容は変化し、繰り返しの

遊びから模倣が始まり、3歳後半には、取り組んでいることの難易度が増し、様々な素材を活用して創意工夫する姿も見られるようになった。またこれらは、他の人とのかかわりの中で、「かかわり」「一人で熟中」を行ったり来たりしながら行われた。また、学生が積極的にかかわるため、学生のかかわりからもたらされた刺激を自分の遊びとして取り入れ、一人遊びに集中するようになることも多かった。

大人（親・保育者・学生）とのかかわりを拠り所として、一人遊びに集中したり、また大人のもとに行ったり、ということを繰り返しながら、次第にその関係性の中に他児が存在するようになり、大人との関係から他児への意識や興味へと移行していることが分かった。

## (2) 大人のかかわりがもたらすもの

金田（2004）は、「子どもにとって大人は、まず内在的关系と外在的关系の両面としての存在であり、この二つを統一する接在的な関係の中で子どもは自己を表現していくと同時に他から学んで人間の子どもとして育ち、今日の大人をのりこえていく」と述べている。さらに「いつも自由で安心感に満ちているのは良いが、それで終わっては一段高次の方向に知的にのびていくことはできない。かといってモデルを自己に取り入れ、言われたとおりにばかりやっているのでは、自己を打ち消してしまうか、内向させてしまい、創造性も育たず、いつも抑圧された形になり人格的に問題を残す」と指摘し、関係性が一方に偏ることなく、複数の大人がそれぞれ異なった役割をとることの重要性を強調している<sup>12)</sup>。

広場は、子育て支援という役割の他、学生の学びの場でもあることから、学生は能動的に子どもや保護者とかかわる特性がある。その中で学生は「かかわりが必要な場面」「見守りが必要な場面」などについて、体験を通して学んでいる。そのため、A児の遊びの状況を理解した上でかかわりが必要かの判断をしているというよりも、まずは能動的にかかわってみる学生がほとんどだ。そのため、A児の能動的なかかわりのみを抽出することは不可能だった。このような理由から、「保育者または学生とのかかわり」の事例数は必然的に多くなった。その結果、大人からのかかわりが多くなることとなった。この時期、大人から多くの言葉を掛けられ、多様なかかわりを経験できるのは、大きな意味がある。

この大人の多様なかかわりを分析した結果からわかるように、子育て支援広場では、親は子どもの内面理解からの支えが多いため、保育者は外側の存在としての働きかけをすることができる。そして、学生は仲間としてのかかわりを中心として子どもの体験世界を豊かにしている。金田は、「豊かな家庭保育と質の高い集団保育の両方を体験し、親と保育者、家族と友だちの間で育つことのできる乳幼児は、今日もっとも恵まれている場合だといえよう」と結論づけ、さらに「問題は、3歳未満児の保育の少ない中で、家庭だけで集団をもたない子どもたちに、それをどう保証するかということ、および子どもの24時間を保育時間だと考えたとき、家庭的な面と保育者的な面をどう保証していくかということであろう」と指摘している<sup>13)</sup>。

子どもにとって必要な人間関係は、「自我の領域に入り込んで支える関係」「仲間としてかかわる関係」「子どものモデルの対象として現れる関係」であり、それを実現するためには、子どもの人数よりも多い、できれば広い世代の集団の中に、子どもが共に存在することが望ましいということがいえる。この集団での生活体験が、自分（自我）から自分たち（自治）へと発展していく基盤をつくるのならば、集団保育に移行する前に、地域の子育て支援広場を活用することは、子どもの発達を最優先に保障していることになるのではないだろうか。

本研究を保育実践に生かし、大人のかかわりの内容と子どもが体験している内容と育ちを質的に検討し明らかにしていくことが今後の課題である。

## 文 献

- 1 黒田実郎（1978）乳幼児集団保育の問題点 — To work or not to work —. 幼児の教育77(9). 30-34
- 2 金田利子（2004）生活主体発達論 — 生涯発達のパラドックス —. 三学出版. 204
- 3 前掲(2) 204
- 4 厚生労働省（2017）保育所等関連状況取りまとめ（平成29年4月1日）.
- 5 小川博久（2010）遊び保育論. 萌文書林
- 6 齊藤多江子（2012）1～2歳児の仲間と物とのかかわり — 「仲間と同じものに関心を持つ」行為に着目して — 保育学研究. 5(2).
- 7 都築郁子・上田淑子（2009）子ども同士のトラブルに対する3歳児のかかわり方の発達的变化 — 1年間の保育記録とビデオ記録にもとづく実践的事例研究 — 保育学研究. 47(1)
- 8 奥田美由紀・狩野奈緒子・柴田千賀子・石井美和・淋光江・長谷川茂（2015）桜の聖母短期大学「親と子の広場」の推移と現況 — 「子育て支援センター」設立に向けての課題と展望 —. 桜の聖母短期大学人間学研究所. 20. 50-71
- 9 奥田美由紀・長谷川美香（2017）学生の学びをより深めるための保育実践の質向上を目指して 第1報 — 子育て支援広場の環境づくりの実践と課題 —. 桜の聖母短期大学紀要. 41. 1-35
- 10 前掲(2) 205-208
- 11 平井信義（1984）「心の基地」はおかあさん — やる気と思いを育てる親子事例集 —. 企画室
- 12 前掲(2) 207
- 13 前掲(2) 208-209